

「姉たちのばかりっ！」

休診日のはずのチューリップ姉妹の診療所に、怒声が轟く。屋外にも響くその声に、近くを歩いていた近所の住民たちがぎょっとして足を止めたが、「ああ、いつものアレか」と、苦笑いして歩を戻した。

奔放な三人の姉たちに悩まされる、生真面目な末の妹。そんな彼女たちを幼い頃から見守ってきた彼らにとって、それは「よくある日常の一コマ」に過ぎなかった。

そしてまた、彼らはそんな日常の一コマに遭遇することと、もう一つの事実を知って安堵するのだ。

——今は、平和なんだな。
と。

「もう、今日という今日は許しませんよ！」

眉間にしわを寄せて仁王立ちになっているホワイトチューリップ。それに対峙する二人の姉……レッドチューリップとイエローチューリップ……は、余裕を失ってはいない様子だった。

「まあまあ、そんなに目くじら立てて怒らなくても……」
「怒りますす！」

取りなすように口を開いたイエローチューリップの言葉を、ホワイトチューリップは即座に遮った。

「一歩間違えば一般の人が大けがをしてしまうところだったんですよ！ 医療従事者どころか、花騎士としてあるまじき行為です！」

「大丈夫だつてば。そうならないように、私たちがいたんだから」

「万が一ということだつてあるでしょう！ おまけに変な噂まで立てられて……」

ことの顛末はこうだ。

イエローチューリップが作った薬の副作用で、とある男が苦しむことになった。それをたまたま発見したレッドチューリップが（下心半分で）看病してやったのだけでも、その男が必要以上にレッドチューリップに入れ込んでしまった。男につきまとわれることに辟易したレッドチューリップは、イエローチューリップとともに一計を案じたのだが、その結果、男が害虫に襲われることになってしまった。「男が害虫に襲われる」までが二人の計略で、もちろん男を襲った害虫は二人によって退治されたのだけれども、今度は「人間に化けて看護師姿で男を

惑わし、恋に墜ちた男を捕食する害虫がいるらしい」という、わけのわからない噂が流れるようになってしまった。「だから大丈夫だって。そんな噂、すぐに消えてなくなるわよ」

レッドチューリップはあくまで楽天的だった。

「それにほら、私たちが見つけた害虫がやってきたルートが、全く新しいものだったから、今度研究も兼ねてそのルートの討伐隊も派遣されるっていうじゃない？ 怪我の功名ってやつよね」

「あれ？ 姉さん聞いてない？ 私たち、そのルートの第一発見者だからっていうんで、討伐作戦の参加依頼が来ているんだけど」

レッドチューリップとイエローチューリップの会話は、いつの間にか「一般人にケガをさせる寸前だった」から「新たに発見された害虫の進行ルートと、それを阻止するための討伐隊の編成」の話題に移っていた。

少しの間、様子を見ているつもりだったホワイトチューリップだったけれども、二人の姉には全く反省の色がないこと……どころか、二人の興味が今後の害虫討伐にしか向いていないことを確信した。

自分のことはそっちのけで、来たる害虫討伐作戦の話題で盛り上がる姉たちの姿に、ついにホワイトチューリップの堪忍袋の緒が切れた。

「姉たちのばかーっ！」

パープルチューリップが、たまたま別の用事で出かけていたのは幸いだった。彼女の冷静な言葉は、時としてホワイトチューリップの感情をさらに逆なでしてしまうこともある。

蜘蛛の子（といっても二人しかいないのだけれど）を散らすように逃げていったレッドチューリップとイエローチューリップがいなくなった診療所の一室で、ホワイトチューリップは興奮冷めやらぬ、といった様子で荒い息をついていた。

——本当に、人の気も知らないで……

「魔女姉妹」などというありがたいあだ名をつけられたのはいつの頃だったか。その汚名を返上すべく、花騎士としても、診療所の医師としても頑張ってきたつもりだったが、姉たちは汚名の返上どころか、喜々としてそのあだ名を受け入れている。